

法隆寺所伝吉祥悔過と天台所修の懺悔法儀

吉 田 実 盛

懺悔の思想はいかなる宗教においても、我執への省みとして重要視されている。仏教においても古くは *kṣama* の訳語としての懺摩あるいは提舍那と言われ、今日でも懺悔あるいは悔過という形で法儀の中に表現されている。ところで、

現在の天台宗では修正会がよく悔過法が修されているが、それとは別に法華懺法が常用の法儀として伝わっている。つまり、ここに悔過法と懺法という二つの懺悔法儀が並存しているのである。これらは如何なる関係があるのであろうか。変遷経路を遡ることにおいて、この問題を検討したい。

○

天台における二つの懺悔法儀の考察にはる前に注目したいのが、法隆寺に伝わる吉祥悔過である。何故に吉祥悔過かといえ、この悔過作法の手文が天台の悔過法の文と大部分一致するからである。この吉祥悔過に関する資料は、わずかに『今昔物語』『続日本記』などがあるのみである。先師の研究では神護景雲二年（七六八）創始の宮中御齊会を起源とみ

なすことができるという。しかし、手文の内容そのままだが御齊会まで遡れはしない。では、現在の法儀はいつごろまで遡ることができるのであろうか。

法隆寺に伝わる資料『金堂日記』は平安末期から鎌倉期の記録を三部にまとめたものである。そのうちの「金堂仏像等目錄」には、

一、安置仏像等、毘沙門天像一体三尺五寸彩色大吉祥天像一体同、前件像以承暦二年戊午正月七日壬午奉始造之、同年十月八日乙酉被開御堂、十一月十二日壬午奉安置之。

とあり、承暦二年（一〇七八）に毘沙門天、吉祥天を造り金堂に安置した記録がある。それに関連して、同じ『金堂日記』のうちの「吉祥御願御行旧記」には

承暦三年歲次己未正月八日戊寅件吉祥御願、年来之間於講堂被勤修而從去年戊午年始造毘沙門吉祥二天像、年中其開眼供養以範使聖為導師、即及于今年正月、既渡移於金堂、以二十口僧侶、如法勤修其請僧等。

以下、吉祥御願悔過のようすを記録している。ここに見える出仕者、作法は現在のもと同じであるからこの承暦三年には現在の悔過法が既に修されていたといえる。承暦三年より今日に伝わる吉祥悔過は正月七日から十四日まで、の八日間、後夜・晨朝・日中・日没・初夜・半夜の六時に悔過を行うものである。六時といっても同じ次第を六度繰り返すという訳ではない。半夜・日中は表白や経の講説といった特別な次第構成になっているし、晨朝・日没はいわゆる略作法である。つまり後夜・初夜が最も悔過作法の特色を表した次第であるといえる。したがって、以下この後夜・初夜の作法をもって法隆寺吉祥悔過として、天台の悔過法と対比していくことにする。

この対比でまず驚くことは、その法式次第のほとんどが一致することである。

〈法隆寺吉祥悔過〉

〈天台薬師悔過〉

供養文	供養文
如来唄	如来唄
散華	散華
呪願	呪願
奉請	奉請
至心発願	至心発願
毘沙門天宝号	

法隆寺所伝吉祥悔過と天台所修の懺悔法儀（吉田）

奉請	奉請
吉祥天宝号	薬師如来宝号
散華（敬礼）	敬礼
大懺悔	大懺悔
	懺悔
	發願
行道	初夜偈
行道	行道
發願	發願
五大願	五大願
呪、行道	呪、行道
	廻向

次第の一致した箇所では文々句々つまりその内容まで一致している。また「行道」のあとの「發願」では、法隆寺と天台の両方共に、

至心發願、正月修善、八箇日夜吉祥悔過。

といい、天台は薬師悔過であるにもかかわらず、その文中に「吉祥悔過」という句を述べている。法隆寺の悔過を天台のそれが転用したのではないかと想起させる部分である。

次に両悔過の上に若干見られた相異点に注目してみよう。結論から言えば、天台の悔過にのみ存する大懺悔の發願と初偈夜は天台宗に今一つ伝わる懺悔法の法華懺法と例時作法の文に一致する。

相異点を個々に検討していくと、吉祥悔過にのみ存在するのは毘沙門天宝号と吉祥天宝号であるが、これは吉祥悔過がこの二尊を本尊としているからであり、薬師悔過に無いのは当然といえる。

吉祥悔過に無く薬師悔過にのみ存在するのは、薬師如来宝号、大懺悔の発願、初夜偈、廻向である。薬師如来宝号が吉祥悔過に無いのはさきの理由からで当然といえる。

大懺悔の発願と初夜偈については例時作法にそれと全く同文を認めることができる。例時作法の大懺悔は懺悔・勧請・随喜・廻向・発願の五悔形態のうちの初めの懺悔と終わりの発願を選びまとめた構成であるが、薬師悔過の大懺悔も全くこれを踏襲しているのである。例時作法の初夜偈は六時破偈とよばれる偈頌群のうちの一つである。つまりその法要を勤修する時刻によって六時の偈を唱え分けるべきものである。しかるに、この薬師悔過で一貫して初夜偈のみを掲げるのは、六時の使い分けをしない簡略化したことを示すものであらう。

また、薬師悔過で最後の廻向は

廻_二向年頭_一廻_二向施主_一

といい、特定の施主に功德を廻し向けることを願っている。これは法華懺法や例時作法等の最後に唱える回向文と同文ではないが、内容的に一致するものといえよう。

これら薬師悔過のみに見られるのはすべて例時作法、法華懺法からの影響であり、時刻や施主などを特定して行法というよりは利他行的な性格をもたせて、儀礼化した内容であることが、その特徴といえよう。

○

天台の薬師悔過は今回の対比研究によって法隆寺の吉祥悔過と頗る類似しているばかりでなく、多分にその影響を受けているのである。しかも、相異点をとらえてみると、そこには、天台古来の法華懺法、例時作法の影響をも認められ、天台独自の法式として成立してきたことをうかがわせるのである。国家祈願の法令に施主をはじめ特定の個人の仏果増進を願うのは、法華懺法や例時作法と同じである。全文一致する大懺悔、初夜偈はもとより、廻向もその影響によるものと考ええてよいであらう。

中国から日本へ、長い歴史の中で天台の仏教は、儀礼化した利他行的法式を成立させていった。法華三昧から成立した法華懺法、常行三昧から成立したといわれる例時作法はこのとき儀礼化がすすんだ代表的なものであるが、如上の研究により、薬師悔過もこうした思想背景に立脚していることがうかがえよう。

△キーワード▽ 吉祥悔過、薬師悔過、懺悔

△註省略▽

（龍谷大学大学院）